

■2012年(平成24年)7月6日 内外教育 第3種郵便物認可



中嶋嶺雄国際教養大学理事長・学長に聞く

大学は個性を持って

4月15日、秋田市内で内閣府国家戦略局主催の「国家戦略フォーラムin秋田」が開かれ、日本の次世代を担うグローバルな人材育成の在り方が話し合われた。この会場として選ばれたのが、その画期的教育システムで教育界、産業界などから注目を浴びる公立大学法人国際教養大学(AIU)。フォーラムでは、同大学生らから日本の大学教育の在り方について問題提起されるなど、活発な論議が交わされた。創立わずか9年目ながら、フォーラムの司会を務めた古川元久国家戦略相も高く評価するほどに飛躍を遂げたAIUの実績はどうして築かれたのか。少子化、地域間格差など多くの問題に直面する地方大学に展望はあるのか。中嶋嶺雄理事長・学長(76)に聞いた。

——この9年間で大学の實力と認知度はどう変わってきたと感じているか。

われわれは一貫した方針を取ってきたつもりだが、東京大学が「秋入学」移行を表明したこともあって、開学以来の9月入学を実施しているAIUの存在が脚光を浴びてきている気がする。ただそれ以前にも、最初の卒業生が出た2008

年の就職率が一流企業を中心に100%となり、それ以降も続いていることで「なぜそれほど好調なのか」と多くのメディアに取り上げられた。そういう意味では認知度はかなり上がった。先日も鳥取市と米子市で講演したが、教育関係者を中心にかなり知っていてくれて関心も高かった。

——どう関心が持たれているのか。
地元の高校から学生を(AIUに)送りたいが、なかなか合格しないので何とかしたいという声は多かった。



インタビューに答える中嶋理事長・学長

——なぜ送りたいのか。

グローバルな人材が育つという点だろう。従来の大学と異なり、全ての授業を英語でやり、全員を1年間海外の提携校に授業料免除で留学させるというのは、他大学にはほとんどないシステムだ。新人生は全員寮生活だし、その他の学生も、約8割がこのキャンパスで生活できるようアパートなどが整っている。つまり、勉強中心の環境が魅力なのだろう。特に、24時間オープンしている図書館は強い関心を持たれ、他県からは知事らの視察も相次いでいる。

今の日本を考えると、グローバルな人材を供給することが重要になっており、こうした知的吸引力があることが秋田県の新たな魅力にもなっているはずだ。

■英語教育に根本的な間違い

——日本の大学教育の現状と問題点は。
端的に言うと、大学が多過ぎる。少子化が進む時代に4年制大学だけで全国に780もある。だから、試験さえ受ければ入学させ、ろくに勉強させないで卒業させるといふ悪循環に陥っている。日本の高等教育にとっては深刻な事態だ。

日本はアジアの先進国といわれてきたが、大学教育に関しては、近隣諸国に後れを取ることもなにかねない。特に、語学力の問題は深刻だ。このまま英語教育を放置しておく、日本人はいつまでも英語ができないという状態が続く。グローバル化の時代に必要なのは、まずコミュニケーション

ヨンの手段としての英語だ。それがうまくいかないというのは、やはり従来の英語教育が根本的に間違っているということだろう。

昨年4月からようやく小学校5、6年に英語が特別活動として入ったが、これはお遊び程度。ところが、韓国や台湾ではテキストを使って教科として盛んに英語教育をやっている。中国もその傾向だ。日本は中学・高校を含めて10年間かけてもほとんどしゃべれない。それは文法主義の英語教育のせいだ、それに受験英語が輪をかけている。AIUでは、それは正反対の英語教育をやっている。英語は能力別学習が大切だ。留学経験者と国内でしか教育を受けていない学生は明らかに違う。EAP (English for Academic Purposes) 英語集中プログラム)を導入し、TOEFLの点数によってレベルを3段階に組み分けて教育するシステムにしている。本学ではTOEFL500点を取らないとBE (Basic Education) と呼ばれる教養教育の授業を受けないし、550点以上取得しないと留学ができない仕組みになっている。留学しないと卒業もできない。こういうことをやらす(英語教育を)平準化しても、コミュニケーションの手段としての英語は身につかない。そういう意味で、日本の大学教育の現状は寒々しいと言える。

——大学は整理せよということか。

整理統合が必要ということだ。ただ、地方大学も一概にレベルが低いわけではないし、むしろ、公立大学の役割はこれから大きくなると思う。地

方自治体が開設する大学は、その地方に人材を呼び寄せる役割を持つことになるからだ。若者が減っている秋田県に全国、全世界から学生が来てくれる。それだけでも大きな意義がある。それができない大学は廃校すべきではないか。こういうことは本来、国家戦略として考えるべき課題だ。

■大学は魅力ある「個性」を持つ

——公立大学として地方自治体の補助を受けている以上、地元の学生を多く入学させるべきという意見がある。その一方で、地方の高校生からすると「高校まで我慢したのだから、せめて大学ぐらい大都市圏に行きたい」という気持ちも根強い。こういう傾向にはどう対応すればいいのか。

ひとえに大学自身が「個性」を持つことだ。

AIUと有名国公私立大学を受かっても、こちらを選ぶ学生も始めている。それは他の大学にない個性があるからだろう。キャンパスの環境や留学生の多さ、英語による授業なども「個性」だ。

日本の大学にこうした個性がどれだけあるか分からない。AIUはカリキュラムが魅力的だし、環境や景観もいい。この前、米国から来た講師や留學生たちがニュージャージー州やニューハンプシャー州のカレッジと似ていて、日本の大学のような気がしないと語っていた。こういう学生が来たくなるような環境整備も大切だ。そして個性化と同時に、「すみ分け」もまた重要だ。AIUは教育中心の大学だが、研究センターの大学もなくては

らない。地方大学でもこういった個性を持たせ、そこに人は集まる。今、全国には86ほどの公立大学があるが、学校名を聞いただけでどんな大学かイメージが浮かぶだろうか。これはそれぞれの大学が克服していかななくてはならない課題だ。AIUは「国際教養」を教養としてグローバルな人材を育てるということで大学の名前にもなった。個性はつきりしている。

——個性は大学自身で考えていくべきということか。

そうだ。確かに、秋田県も進学志向は東京や仙台を向いている。その中で(学生を確保するには)どういう個性を大学が持つのが重要になる。これからは大学名というブランドではなく、大学でどれだけのことを学んだかが評価される時代になつてくる。

——社会はグローバルな人材だけを求めているとは限らないのでは。例えば、公務員を志望する学生は安定志向だったり、内向きの傾向があるという。これにはどう対処すべきか。

少し違う答えになるかもしれないが、AIUの学生は留学先で日本のよさに目覚めるという話をよく聞く。それは主として日本の「ものづくり」の素晴らしさだという。だからおのずと「ものづくり」に関わる企業を目指す傾向が強くなる。留學は極めて大きな人生経験だ。十分コミュニケーション

シヨンできる程度に英語を習得させ、外国人に通じればきつとやる気になる。今の学生はそこまでいらないから内向きになり、「日本でこのままいればいい」と思ってしまうのではないか。こうした(内向き)傾向には、われわれ教育者の責任もある。きちんとステップを刻んで学ばせなければならぬ。A I Uでは「三言語主義」を目指し、第2外国語もものになるようなカリキュラムを用意している。例えば、韓国語を学ぶと韓国に興味を持ち、韓国の大学へ留学し、帰国すると英語以上に韓国語が話せるようになる学生もいる。実際に(留学で)韓国の食文化に関心を持ち、大手食品会社に就職した女子学生がいた。この会社の社長からは「よくこんな学生を送ってくれた」とお礼の電話を頂いた。

——有名大学志向ばかりではなくなると。

そうだ。それに地域貢献というのも大学には重要な要素だ。例えば、松本大学という私立大学が長野県松本市にはあるが、全国の学長たちが評価する大学ランキングの地域貢献分野では上位にある。(入学試験の)偏差値はそう高くないが、地域に密着した学生活動が盛んだ。それを日常的にサポートする大学の教育システムは高く評価され地域に貢献する人材を育てている。これも大学としての在り方だ。

■秋入学はグローバルスタンダード

——秋入学についての見解を。

A I Uでは、9月入学は全体のまだ35%程度だ。

実際に高校とうまく連携しないと全てを秋に移行するのは難しいだろう。一方で、(春から秋入学までの間に)本学のように高校から推薦を受けた生徒に夏合宿セミナーを受けさせ、入学前に英語力を向上させたり、海外ボランティアをしたりして自分の目的意識をはっきりさせて入学することができるメリットもある。秋入学の問題は、入学時期だけの問題ではなく、単位互換制度などをグローバルスタンダード(国際基準)にする必要がある。日本全体(の教育システム)がそこまでやれるのかどうかは課題だ。

——ギャップイヤーができると実質的に5年分の学費が必要になり、不況の時代、親の学費負担増を懸念する指摘もある。

確かにご指摘の問題はある。しかし、A I Uは今年度から授業料を3割値上げして年間69万円としたが、学生や親から一切クレームはない。その理由は、留学費用が無料だからだ。(留学先大学との)授業料相互免除の協定を結ぶので、例えばカリフォルニア大学デービス校は年間授業料が約300万円掛かるが、それが不要と考えればとても安い。大手有名私大の授業料と比べても半分だ。

——公的補助金を減らし自前で運営する考えは。 A I Uの年間運営費は約20億円だ。それを私大のように(独立した経営に)するには授業料を200万円にしなければならぬ。今は公立大学法人として県のお世話になり、県の役にも立ちたいと思っている。その一環として東アジア調査研究センターを今春開設した。

——内容と目的は。

「行動するシンクタンク」という位置付けで、元市長や大手商社マン、マスコミ出身者などそうそうたる講師陣を集めることができた。当面は、東アジア地域と日常的につながるような交流ができないか、関係を深めるにはどのような活動、例えば秋田産物の輸出などをどうすればもつと拡大できるか、観光ビジネスにつながる新たな航路はつくれないかなどを研究し、実践するフィールドワークもやってみようつもりだ。

——理想とする大学の規模は。

今の施設とスタッフであれば、開学10周年ごろには1学年200人程度にするのがいいと考えている(現在は1学年175人)。大学院も含めて1000人程度が目届く教育ができる範囲だと考えている。

——ここまで国際教養大学が実績を上げてきたのは、中嶋学長のリーダーシップや手腕があればこそ、との評価がある。後任の問題はどう考えているか。

いつも頭の中にある問題だ。ここまで基礎をつくったのだから心配のないようにしていきたい。(寺内豊鷹〓秋田支局長)

「言語活動」を
考えるなら
この1冊!

くりかえし指導したい44の言語活動

横浜市教育委員会(監修)

あらゆる授業で応用可能な実践例を収録!

国語科だけでなく、全教科等で進める言語活動の充実! ます教師がやってみる! 授業をサポートする実践例が満載!

●85判・172頁●定価 2415円

時事通信社

内外教育

2012年(平成24年)7月6日(金) 第6178号
(購読料金 月額税込み4,200円)

●昭和21年12月12日 第3種郵便物認可 ●毎週2回火・金曜日発行
(但し祝日等を除く) ●発行所 〒104-8178 東京都中央区銀座
5丁目15番8号 時事通信社 ©時事通信社2012
誌面内容に関するお問い合わせ(編集部) educate@grp.jiji.co.jp
ご購読に関するお問い合わせ(業務管理部) dokusya@jiji.co.jp

時事通信社

目次

〈あすの教育〉
中嶋嶺雄国際教養大学理事長・学長に聞く
大学は個性を持って……………2~4

〈私学最前線・わが校の取り組み〉
吹奏楽部で結ぶ国際友好親善の絆
福岡勲・玉名女子高等学校長(熊本県)……………5

〈モンスター・ペアレント論を超えて〉
第94回 先生が元気になる集い イン ○○
小野田正利・大阪大学大学院教授……………6~7

全特長が10の提言案
新会長に井上都立久我山青光学園校長……………8~9

懸念される加配定数削減の影響
全国都道府県教育長協議会の2011年度
「研究報告」①……………10~11

〈アンテナ・スポット〉▷全小中学生に体力テスト
▷災害時のため教室にマイ備蓄▶沿岸部小中学校を津波避難ビルに▷学校防災マニュアル見直し
で手引書▷小中学校中心の避難所の開設・運営マ
ニュアル▷被災地の防災教育研究で視察団▶緊急
情報を直接配信▷盗撮の小学校教諭を免職▷盗撮
の講師ら2人を懲戒免職、など……………12~15

〈文科省三役の定例記者会見・抄録〉
6月29日(金) 平野博文文科相……………16~17

〈教育法規あらかると〉
セクハラ防止義務の行方……………18

〈評の評〉6月の新聞
大学教育改革をめぐって……………19

〈ラウンジ〉変化する教育改革……………20

改革論議は踊る

毎日新聞社専門編集委員●玉木研二



これまで「四六答申」あり「臨教審」あり「教育
改革国民会議」あり……。教育改革論議になる
と、まず過去の答申、報告を指折ることになる。
今、文部科学省は「社会の期待に応える教育改
革の推進」や「大学改革実行プラン」と新指針を
示すが、前の論議と重なるところが少なくない。
40年以上前、「第3の教育改革」をうたい、六
三三四制の弾力化や大学種別化など、思い切った
改革を提起した中教審の四六答申(1971年II
昭和46年)に出たのでこう呼ばれる。表題を伏せ、
今いきなり内容を公表しても、「なかなか斬新だ」
と感心して読まれるかもしれない。

当時、既存制度下の現場の反論、抵抗は強かつ
たといわれ、状況はさして動かなかつた。
80年代、荒れる学校、受験過熱などを背景に登
場した中曽根政権の臨時教育審議会は、異称「教
育臨調」という政治課題になった。幸か不幸か私
は番ではなかつたが、担当記者らは「夜討ち朝駆
け」の取材に走り、会議室の壁に耳を当て(記者
用語で「壁耳」という)、中間報告の一片でも一
言でも先に取ろうとエネルギーを費やした。
今は昔の物語である。この時の取材経験者は現
役にはほとんどいない。4次にわたる答申は、個
性重視、生涯学習、国際化への対応などを打ち出

し、その理念は今も新しいが、「想定外」の時代
変化も起きた。予想を超えるペースで進んだ少子
化と大学進学率の高まり、学力低下などだ。
と、改革論議を時系列的に並べても、何やらむ
なしい。なぜ、十分に結実しなかつたか。「失敗
の本質」は、たぶん、実現にじつくりと手間をか
けなかつたことにある。たとえば、鼻白む向きが
あるかもしれない。
しかし、例えば、いつも改革論の柱になる大学
入試改革は、本来の理念に沿った
定着の前にやすきに流れ、学力抜
きのお手軽入試の横行となつたで
はないか。
もちろん、忘れやすいメディア
の責任は棚上げにはしない。

